「金沢大学で学ぶ学部留学生の学習上の問題点」に関する聞取り調査

長野　ゆり・峯　　正志

1．はじめに

金沢大学総合日本語コース（以下「総合コース」）は平成17年度後期から新プログラムに移行する予定である。この直接の理由は，第一に独立行政法人化に伴い，従来のプログラムの効率化を図らなければならなくなったことがあげられる。更に，金沢大学では平成17年度後期に工学部の角間への統合移転が予定されており，従来工学部キャンパスで行っていた日本語の授業を廃止することで，角間での日本語プログラムの充実を多少なりとも図ることが出来るようになったこともある。

この総合コースの改編のために，金沢大で学ぶ全留学生を対象にニーズ調査を行い，その結果は峯・長野（2004）に報告されている。本稿はこれを補完するための追加調査である[1]。

今回このような追加的調査を行ったのは，総合コースは異なるニーズを持つ留学生を一緒に教える日本語プログラムであるということに起因する。もともと日本語補講コースであったプログラムを，1998年に総合コースとして改編した理由は，単位の必要な学生（金沢大学短期留学プログラム生）をこのコースで引き受けることになったからであったが，それから６年半経った現在では，単位を必要とする学生の種類は増え，日本語・日本文化研修コース生，日韓プログラム生に加え，更に学部留学生も受け入れている。つまり，様々な立場の留学生が同じコースで学んでいるため，それぞれの学生のニーズを個別に掴む必要性があるのである。前回の調査は全留学生を対象にしたものであった。

さて，今回対象とした学部留学生は総合コースが想定していた従来の対象とは大きく異なるものである。総合コースの元々の対象は，単位の要らない研究留学生や，単位は必要でも日本人とは異なる特別な配慮のある授業を受け，かつ短期で留学を終え

1　新プログラムへの以降は平成17年度後期であるが，中期計画では平成21年度で完了予定であり，この間は定期的に見直し，修正が図られる予定になっているため，今回の調査の後も引き続き同種の調査を行っていく予定である。

る学生である。それに対して学部留学生は，最初から日本人学生と同じ環境で学び単位を取り卒業しなければならない。つまり，後者は前者に比べ，要求される日本語のレベルが格段に高い。その上,受講する日本語の授業数も少ないのである。両者のニーズは大きく違うことが予想される。

学部留学生に総合コースの授業を提供するようになったのは2003年４月からである。それまでは総合コースとは別の日本語クラスを提供していたが，授業コマ数の合理化を図る目的で,総合コースの一部の授業を学部留学生に開放することで従来の「日本語 B」をやめることとした。総合コースは通常クラス，漢字クラス，技能別クラスの三種類のクラスからなるが，そのうち技能別クラスを「日本語 B」として開放したのである。通常クラスを開放しなかったのは，通常クラス（中級，上級の場合）が週３回の連続したクラスだからである。その結果，技能別クラスだけは「総合コース」として受講する学生と「日本語 B」として受講する学生が一緒に授業を受けるという形になっている[2]。

２．調査方法

２．１　調査方法

本稿では，教養的科目言語科目「日本語 B」を必修とする学部留学生（１・２年生）に対して面接調査を行った。アンケート調査でなく面接調査にしたのは,日本語能力の関係で（自分の考えを十分に表現出来ない可能性が考えられた），アンケートでは十分な回答を期待できないと考えたからである。また質問項目が多岐に渡るため,アンケートの量が膨大になること，人数的な面でも十分可能であると判断されたこともある。

留学生には調査についてのビラを配り協力できる人を募った。協力してくれると答えた留学生に対して，一人一時間弱の面接を行った。

２．２　調査対象

「日本語 B」を現在受けている学部留学生のうちから11名に調査を行った[3]。協力してくれた留学生は全員一年生であった。なお以下の記述では，個々の留学生について述べる場合は，下のカテゴリーを用いて言及する。

２　総合コースの概要は，http：//isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/gaiyou.html を参照のこと。

３　金沢大の学部留学生（正規生）の数は73人。そのうち１年生は23人，２年生は18人である。

表１　学生のカテゴリー

グループ	母語	専攻分野	金沢大学入学までの経歴
A	中国語（６名）	文系[4]	母国で高校または大学を卒業し，半年～１年半（全員が最低半年は日本で）日本語を学習した後，金沢大入学。
B	韓国語（２名）	理系	母国で高校卒業後，日韓プログラムの予備教育を受け来日。金沢大での半年の研修（日韓プログラム）の後，金沢大入学。
C	マレー語（３名）	理系	母国で高校卒業後，母国の大学で日本留学の予備教育を２年受け，金沢大入学。

３．聞取り調査の結果

３．１　授業の履修状況

今までに履修した科目のうち，「授業内容がよくわかった科目」と「授業内容がわかりにくかった科目」を挙げてもらい，それぞれについてその理由も聞いてみた。また，単位の取得状況についても聞いてみた。

３．１．１　授業内容がよくわかった科目とその理由

表２　授業内容がよくわかった科目とその理由

科目（「専[5]」以外はすべて教養的科目）	理　　由	学生の所属グループと人数
日本語Ｂ	受講者は留学生だけで，また先生は日頃留学生と接しているため，留学生にとってわかりやすい教え方をしてくれるから	Ａ：５（６[6]）名 Ｂ：１（２[6]）名 Ｃ：３名
日本事情Ｉ	留学生限定の授業なのでストレスがなく積極的に授業が受けられるから	Ａ：1名
英語Ａ，英語Ｂ，生涯スポーツ演習，微分積分，線形代数，微分方程式（専）	理解のために日本語があまり必要でないから	Ａ：４名，Ｂ：１名 Ｃ：２名
遊牧騎馬民族と中国，物理学Ｉ・II，物理学序論（専）	説明・板書がわかりやすいから	Ａ：１名，Ｃ：１名
物理学序論（専），21世紀を生きるためのキャリアプラン	テキスト・プリントの説明がわかりやすいから	Ａ：１名，Ｃ：１名
経済学	自分の専門分野だから	Ａ：１名
21世紀を生きるためのキャリアプラン	毎回講師が変わるので新鮮で内容的にも興味があるから	Ａ：１名
ほぼすべての科目	理由不明	Ｂ：１名

4　2005年４月から理系に転学予定の１名含む
5　専門科目
6　本文参照。

上記の「日本語 B」について若干注釈を加えると，まず第一に，この「日本語 B」という科目は，他の科目とは基本的に性質を異にする科目であるということを確認する必要がある。受講対象者が留学生に限定されている（したがって彼等に焦点を合わせた授業が行える）ということ，また，外国語としての日本語教育の専門家であり，且つ日頃留学生と接していて彼等にとってわかりやすい教え方を熟知している教師が担当する科目，という点において，「日本語 B」は留学生にとって本来きわめてわかりやすい科目であると言えよう。

第二に，２名の学生は「日本語 B」を「よくわかった授業」としては挙げなかった。しかしこの２名は11名の中では日本語力が最も高い学生であり，「日本語 B」を特に「よくわかった授業」として挙げなかったのは，言わばそれが当たり前のことだったからだと推測される。すなわち，「日本語 B」は11名全員にとって「よくわかった授業」とみなされていると考えてよい。

「日本事情Ｉ」も受講対象が留学生に限定されており，したがって，留学生に対して特別の配慮がなされているという点において「日本語 B」と基本的に性質を同じくする科目である。

上記の点を考慮した上で，彼らにとっての「わかりやすい授業」とはどういう授業なのかを考えてみよう。

「よくわかった理由」を挙げた延べ人数25名（「日本語 B」については上記の２名も含める）についてその内訳を見ると，「留学生にとってわかりやすい教え方をしてくれるから」：11名，「留学生限定の授業なのでストレスがなく積極的に受講できるから」：１名，「理解のために日本語があまり要らないから」：７名，「説明・板書がわかりやすいから」：２名，「自分の専門分野だから」：１名，「テキスト・プリントの説明がわかりやすいから」：２名，「講師が新鮮で内容的にも興味があるから」：１名，となっており，最初の三つの理由を挙げた学生が延べ19名と４分の３以上を占めている。すなわち，留学生に対して特別な配慮がなされない一般の授業で，且つ日本語も理解のために一定以上必要な授業を「よくわかった」と言う学生は，きわめて少ないのである。講義の理解は，学部留学生にとって決して容易ではないことが見て取れる。（ただし，「大体全部の科目がよくわかった」と答えた学生も１名いたことを付け加えておく。）

3.1.2　授業内容がわかりにくかった理由

表3　授業がわかりにくかった理由

理　　　由	学生の所属グループと人数	備考（(　) 内はそれを述べた学生の所属グループ)
自分の専門分野とかけ離れている（自分は文系なので，理系の基礎知識がない)	A：1名	
1回の授業で進む量が多い	B：1名	
理解のために日本語の必要度が高い	B：1名 C：1名	
話すスピードが速い	A：2名	日本人学生もおそらくよくわかっていない。授業中は寝ている人が多い（A)
マイクを通した声が聞取りにくい，声が小さい，声がはっきりしない	A：1名 C：1名	出席者の約3／1 (女子) は多分わかっていない（C)
話し方がわかりにくい (大学の先生が講師のとき) (大学の先生ではない外部の人が講師のとき)	B：1名 A：1名	複数の講師が担当。大学教員の他，外部の人を講師として呼ぶこともある
書かれた形での説明がない／不十分（配布資料や板書がない／不十分)	A：2名 B：1名	板書については「読みにくい」も含む
専門用語が多い・難しい	A：3名	
カタカナ英語がわからない	A：2名	
毎回の授業後に書いて提出する課題があり，課題をすぐに理解して書くのが大変	A：1名 B：1名	
テキストの日本語が難しくわかりにくい	C：1名	
学籍番号によって席が指定されたので後方に座ることになり，よく聞き取れないし質問もしにくい	C：1名	前半と後半で先生が違う。前半の先生は「留学生は日本人学生とは違うケアが必要」と考えていて，「わからないことがあったら聞いてくれ」と言ってくれた。いつも前の方に座っていたからよく聞き取れたし，よく質問した。ところが後半になって先生が変わると共に状況がすっかり変わってしまった（C)

上に挙げられた理由のうち，最初の二つ（「自分の専門分野とかけ離れている」「1回の授業で進む量が多い」）以外はすべて，日本語能力上の問題点に関する（その可能性がある）ものである。

ここで問題となるのは，これらの問題のうち，どれが（または同じ問題でもどこま

でが）留学生特有の問題なのかということである。（留学生特有の問題と断定できるのは「理解のために日本語の必要度が高い」「カタカナ英語がわからない」のみである。）それによって問題への対処の仕方が変わってくるからである。たとえば「話すスピードが速い」については，もしそれが日本人学生にとってもついていくのが困難な程の早口であるならば教師に話し方を変えてもらわなければならないが，そうでないとすれば，留学生の聴解能力を高めることで解決できるし，またそうしなければならない。「話し方がわかりにくい」にも様々な要因が考えられ，日本語を母語とする者にとってもわかりにくい話し方なのかそうでないのかによって，教師・留学生のどちらに改善努力が求められるかが変わってくる。（ただし，このことは「留学生特有の問題なら，それは常に一方的に留学生側に改善努力が求められるべきものである」ということは意味しない。後述するように，教師の側の（全体的な授業運営に支障をきたさない範囲内での）ちょっとした配慮や工夫によって，大いに改善される可能性のある問題もあるからである。）

聞取り調査では当初，「わかりにくかった科目」を挙げた留学生に対して「その科目は日本人学生にとってもわかりにくかったと思うか」という質問項目を設けていたが，大多数の留学生は答えられなかった。また，たとえ答えられたとしても，それが事実と合っているかどうかは別問題である。日本人学生の理解度を把握するためには，直接彼等を対象とした調査を行う必要があるが，今回それは実現できなかった。したがって，表３から見て取ることができるのは「留学生特有の<u>可能性がある</u>日本語能力上の問題点」に留まり，残念ながら「留学生特有の日本語能力上の問題点」を浮かび上がらせることはできない。

しかしながら，留学生特有の問題であってもなくても，教師の側の配慮･工夫によって留学生の困難は明らかに軽減されるであろうと思われる問題点がいくつか存在する。「学部留学生の講義の理解を支援する」というきわめて現実的な観点から，このことを検討してみたい。改善の余地があると思われるのは，次の４点である。

①「マイクを通した声が聞取りにくい，声が小さい・はっきりしない」

マイクの使用方法は技術的な問題であり，また「声が小さい・はっきりしない」については，教師がそのことを認識し心に留めるだけで，状況はかなり好転するものと思われる。

②「書かれた形での説明がない，または不十分（配布資料や板書がない，または不十分）（「板書が読みにくい」も含む）」

講義を聞いて理解することは留学生にとって決して容易ではなく，書かれた形での説明があることは，彼等にとって大きな助けとなる。配布資料については，その場で

渡されても留学生はすぐには読めないことが多い（表５参照）ので，できれば留学生には前もって配布されることが望ましい。板書がある場合も，くずした字体や略字は特に非漢字圏の学生にとっては判読が難しくなるので，これらの使用を避ければ彼等の負担はかなり軽減される。

③「学籍番号によって席が指定されたので後方に座ることになり，講義の聞取りも質問も難しくなった」

留学生にとって「教室のどこに座るか」は講義の理解度を左右する重要な関心事であり，彼等にとっての「いい席」とは普通前方の席である。後方に座ると講義の聞取りが難しくなるばかりでなく，教師とのコミュニケーションが疎遠になりやすいため，多くの留学生は前方の席を選ぶ。学籍番号順に着席させる授業においても，例外的措置として留学生に前方に着席することが許可されるなら，それは彼等の講義の理解を助けることは間違いない。

④「外国の学者の名前の発音が母語における発音と違うので，何のことかわからず「知らない」と言ったら無知であるとみなされ，傷ついた」

表３には記載しなかったが，「授業がわかりにくかったわけではないが」と前置きして上記のような経験を語った留学生がいた。固有名詞の発音は言語によってかなり異なる。「カタカナ英語がわからない」という留学生が常に存在するのを見てもわかるように，日本語の中に入り込んだ英語も本来の発音とはかなり違った形で発音され，英語圏の学生でさえ（だから余計に？）何のことか想像もつかないという場合が多い。留学生が外来語，特に固有名詞を聞いて「知らない」という場合，それは，発音が日本語風に変わっているためであることが多いのである。教師がこのことを知識として持っていれば，留学生を意味なく傷つけ，結果として学習意欲を削ぐことも避けられる。

学部留学生には本来，日本人学生と同等の立場で学習できることが求められており，彼等に対して特別の配慮をすることを教師に求めることはできない。しかし，全体的な授業運営に支障をきたさない範囲内で，且つ教師の負担を著しく増やすこともなく，留学生の講義の理解を助ける配慮・工夫を施すことは十分可能なのである。

３.１.３　単位の取得状況

単位は今のところ十分取れているかどうかについて聞き，単位を落とした学生については，その理由も聞いた。(理由は飽くまでも学生自身の判断によるものであり，実際の理由は違うものである可能性もある。) 11名のうち，履修したすべての科目の単位が取れた学生は６名，単位を落とした科目がある学生は５名であった。

表４　単位を落とした理由

単位を落とした理由（自己判断）		学生の所属グループと人数
試験ができなかった	前提とされる予備知識がなかった（日本では高校で学習することだが，母国では学習してこなかった）	A：１名
	内容的に（母国の高校時代から）苦手	B：１名
	試験の出題範囲として指定された本を読んで理解するのに時間がかかり，準備の時間が足りなくなった	C：１名
	問題の意味がよくわからなかった	A：１名 C：１名
	答えを日本語でうまく書けなかった	C：１名
	問題数が少なく一つの問題の配点が多いが，全問半分位しか答えを書くことができなかった	C：１名
課題がうまくできなかった	ホームページを作るという課題がうまくできなかった（保留となったが最終的には合格した）	C：１名

表４からわかるように，「レポートのために不可になった」と思っている留学生は１人もいない。単位を落とした理由を挙げた留学生延べ８名のうち，７名は「試験ができなかったため」と考えている。十分時間をかけて作成することが許されるレポートと異なり，限られた時間内に解答しなければならない試験は，やはり留学生にとって容易ではないと思われる。

また試験ができなかった理由は，「前提とされる予備知識がなかった」「内容的に苦手」以外はすべて，日本語能力上の問題である（「試験ができなかった」学生延べ７名のうち５名）。

なお，現在履修中の２科目について「試験の問題形式が『〜について述べよ』形式で，しかも（漢字が苦手なので漢字を調べるため）辞書を使いたいのだが使わせてもらえるかどうかわからないから心配だ」と言った学生が１名いた（８番）。文章力が要求される「〜について述べよ」形式の問題は，留学生にとっては厳しいもののようである。

３．２　学習上の困難

「今金沢大学で勉強していてどんなことが大変か」について，「講義の理解」，「本・資料の理解」，「レポートの作成」，「発表，意見や質問を述べること」の４項目に分けて聞いてみた。３．１．２で述べたように，これらが留学生特有の問題であるかどうかは確定できない。

3．2．1 講義の理解における困難

表5 講義の理解における問題点

困難を感じる点	学生の所属 グループと人数	学生のコメント （（ ）内はそれを述べた学生の所属グループ）
知らない・難しい言葉が多い (特に専門用語・カタカナ語)	A：6名 B：1名 C：3名	特にカタカナ英語。日本人の英語の読み方は中国人の読み方と違うから（A） 特に漢語。カタカナ英語の方がよくわかる（C）
日本についての知識が不足していると感じる	A：5名 B：2名 C：1名	日本人学生が笑っているとき，ついていけないことがある（A1名，B1名） （特に古い時代の）歴史の知識が不足（A2名） 昔話，ことわざなどがわからない（A） 日本の習慣を知らない（C） 日本人の著明な哲学者とその思想を知らない（B） 日本文化などについての基礎的な知識が必要な科目は取らないようにしている（B） 言葉自体はわかるが内容がわからないことがある。非常勤の先生は大学にいつもいないから質問できない。シラバスにもメールアドレスがない。（A） 理系だからそれ程問題にならない。日本語力そのものの不足の方が問題（C）
先生の音声が明瞭でない (発音不明瞭，声が小さい・はっきりしない，マイクの使い方が不適切)	A：5名 B：1名 C：1名	先生によってはときどきそういうことがある（A5名，C1名） 先生によってわかりやすさに非常に差がある（B）
先生の話すスピードについていけない	A：3名 C：2名	文系の先生は大丈夫だが，理系の先生は速い。理系の先生は内容だけ考えて，言葉についての配慮があまりないようだ（A） 最初は大丈夫がだんだん疲れてきて，90分集中力が続かないときもある（A）
個々の文は理解できるが，全体として何を言っているのかよくわからない	A：2名 C：3名	ときどきあるが，それは日本語の問題ではなく内容の問題（A） 先生の話し方がわかりにくいから（C） 特に大教室での一般の科目（C） 日本語・内容，両方の問題（A）
ハンドアウトがない／あっても前もって配布されないので授業中すぐに読めない	A：2名 B：1名 C：2名	前もって配布されないことが多い。その場で渡されてもすぐには読めない（A1名，C1名） 完全にはわからないが，全体としてはわかる（B） 大体問題ないが，古い（文語の）資料が読めなかった（A） 説明プリント・練習問題プリントの2種が配布されるが，説明プリントは難しくて読むのに時間がかかるから読まない（C） その場で配布されても大体わかる（A2名）

板書が読みにくい	B：１名 C：３名	特に漢字。くずして書かれると読めない（C） （１箇所にまとめずに）あちこちに書かれるとわかりにくい（B） 隣の人に聞けない場合は，書いてあるとおりに真似て書いておき，あとで調べる。略字は困る（C）
一つの文の構文がつかみにくいことがある	A：１名 C：２名	否定表現が沢山でてくるとわからなくなる（A）
ノートを取るのが大変	B：１名 C：１名	
※その他の一般的コメント 講義は話すスタイルが大体決まっているので難しくない。100%わかるとは言えないが，ノートを取ってそれを家で読み直せば理解できる（C） 「聞いて理解する」ことはあまり問題ない。授業によって多少違うが，平均すると80%くらいは聞き取れていると思う（A） 単位を取るのに必要な程度には聞き取れているが，日本人のようには聞き取れていないと思う。大学の４年間でもっと日本語を勉強したい（A）		

上に挙げられた困難のうち，「先生の音声が明瞭でない」，「ハンドアウトがない／前もって配布されない」，「板書が読みにくい」については（３．１．２で述べたように），教師側の配慮によってかなりの程度改善され得るものである。

「個々の文は理解できるが全体として何を言っているのかよくわからない」については様々な要因が考えられ，もう少し問題点を明確にしなければ対処方法もみつけられないが，あとの項目はすべて，留学生の日本語力や日本についての知識・教養のレベルアップを図ることによって解決され得る・解決すべき問題である。これらの問題のうち，「語彙力の不足」を挙げた学生が最も多かったのは予想通りだったが，「日本についての知識の不足」を挙げた学生が二番目に多かったのは予想外であった。（「日本文化などについての基礎的な知識が必要な科目は取らないようにしている」という学生さえいる。）学生たちのコメントを総合すると，「大学に入るまでは，詰め込み受験勉強と日本語能力試験対策など狭い意味での日本語の学習に汲々とし，入学してからは単位を取るのに必死で，日本についての知識・教養を身につける時間がない。その結果，日本人の同年代の若者が普通知っているようなことを知らない」ということのようである。現在学部留学生が教養的科目として履修している「日本語B」は，留学生センター総合コースの「技能別クラス」を兼ねており，その性格上，広く日本についての知識・教養を身につけることを主目的としてはいない。しかし総合コースの「日本語クラス」（四技能の総合的な習得を目指すという点において「技能別クラス」とは異なる）の上級クラスは「日本語や日本文化･日本社会についての理解を深める」

ことを到達目標の一つに掲げており，学部留学生がこれを履修するという可能性も開かれている。とはいうものの，週３回出席が求められる「日本語クラス」上級を学部留学生が履修することは現実にはかなり難しいので，週１回開講されている「日本語B」の中にそのような科目，または学習内容を導入できないか，検討する余地がある。

３．２．２　本・資料の理解における困難

表６　本，資料の理解における問題点

困難を感じる点	学生の所属グループと人数	学生のコメント (（　）内はそれを述べた学生の所属グループ)
難しい言葉·表現が多い	A：２名 B：１名 C：３名	特にカタカナ語（A） 辞書で調べるが，その文脈における正確な意味を把握するのが難しい。誰かに聞きたいが誰に聞けばいいのかわからない（A）
漢字を読むのに時間がかかる	B：１名 C：３名	その結果，ハンドアウトの説明は読まない（C）
日本についての知識の不足を感じる	A：２名 C：１名	理系のものは大丈夫だが，文系の文章ではときどき感じる。もっと日本の歴史・文化・考え方などを勉強しないと，本当の意味で日本語は上達しないだろう（A） 哲学関係は抽象的なので難しい。歴史の知識も足りない。留学試験には地理は出るが日本史はあまり出ない（A）
個々の文は理解できるが,全体として何を言っているのかよくわからない	A：１名	日本語能力試験１級の読解問題もそんな感じだった。「要するに全体として何が言いたいのか」がよくわからない（A）
※その他の一般的コメント 意味を把握するのはあまり問題ない（A４名，B１名） 音読すれば読み方を間違えるかもしれないが，意味の把握はあまり問題ない（A） 文法で忘れかけていることが多い（A） 今はまだあまり読んでいない（C）		

漢字の問題以外は講義の理解のときと同じ項目が挙がっているが，「語彙力の不足」を挙げた学生はここでも一番多かった。「漢字を読むのに時間がかかる」学生４名のうち３名は非漢字圏の学生だが，１名は韓国の学生である。非漢字圏の学生１名は「だからハンドアウトの説明は読まない」と答えており，漢字理解の困難が学習に大きく影響していることがうかがわれる。

一方，「意味の把握にはあまり問題がない」と答えた学生も５名いたが，このうちの２名は，それぞれ「語彙力の不足」と「日本についての知識の不足」を挙げてもいる。

3．2．3　レポート作成（書くこと）における困難

表７　レポート作成（書くこと）における困難

困難を感じる点	学生の所属グループと人数	学生のコメント（（　）内はそれを述べた学生の所属グループ）
内容を考えるのが大変（日本語の問題は殆どない）	A：２名	専門的な資料を調べなければならないときに知識不足を感じる（A）
日本語の文を組み立てるのが大変	A：３名 C：３名	母語から日本語に翻訳する（A） 母語で考え，それを英語で文章化し，それを日本語に直す（C） 自分の言葉で文章を作るのが難しい。専門外の内容のときは，資料をそのままコピーしてしまうこともある（A） インターネットで調べた英語の資料を日本語の文に直すのに時間がかかる。資料が日本語のときはポイントをコピーしてしまうこともある。先生はレポートをそんなに詳しく読んでいないからわからないと思う！（C） 文法的に正しく書くのは難しい。チェックを頼める日本人の友人もまだいない（A）
言葉･表現を調べるのに時間がかかる	A：２名 B：２名 C：１名	母語から日本語に翻訳することもある（A）
レポートの書き方がわからない	A：３名 B：１名	日本語学校で多少習ったが，きちんと習ったことがないのでわからない（A） 今「日本語 B」のレポート作成クラスで勉強している（A２名，B１名）先生は留学生だということを考慮して読んでくれる（B）
資料･参考文献を読んで理解するのが大変	A：２名 C：１名	資料・参考文献を捜すのは問題ないが，それを読むのが大変（A）
レポートで使う書き言葉･表現などがわからない	A：１名 B：１名	話し言葉・書き言葉の区別が難しい（A） 今「日本語 B」のレポート作成クラスで勉強している（B）
漢字を正しく使うのが大変	B：１名 C：１名	漢字を書くことは大きな問題。試験の前には漢字の勉強もしなければならない（B）
全体の構成を組み立てるのが大変	B：1名	論理的な構成を組み立てる上で，適切な表現（接続詞など）を正しく使うのが難しい（B）
「日本語らしく書く」のが難しい	A：１名	理系のものは大丈夫だが,文系の方が難しい。レポートの書き方は勉強すれば身に付くが,「日本語らしく書く」には文化の壁を乗り越えなければならない（A）
正確に格調高く書くのが難しい	A：１名	簡単な言葉では書けるが…（A）

※その他の一般的コメント 　レポートを書く機会は少なく，試験の方が多い。試験の時間内に書くのが問題（A） 毎回授業後に課題が出てそれについて調べて書く（「～について述べよ」形式）科目が大変（C）

「日本語の問題は殆どない」と答えた学生も２名いるが，この２名も他の複数の項目に名を列ねているので，実質的には11名全員が「日本語で書く」ことに困難を感じていると言える。「困難を感じる点」を挙げた延べ27名のうち，内容に関することを挙げたのは２名のみで，あとの25名はすべて日本語能力上の困難を挙げている。表４を見ると「レポートで単位を落とした」と思っている学生は１人もいないが，この表を見る限り，実際にはその可能性も大いにあると思われる。「日本語らしく書くのが難しい」「正確に格調高く書くのが難しい」といった言わば「高級な」悩みを挙げた学生も２名いるが，大多数の学生は，レポート作成上要求されるきわめて基本的な能力が十分でないと自己診断している。したがって「レポートの書き方を学びたい」というニーズはかなり強いと思われるが，現在留学生センターの総合コースの技能別クラスの一つ，「レポート作成」は「日本語Ｂ」として学部留学生にも開講されており，その意味で彼等のニーズに応えていると言える。（現在履修中の学生も４名いる。）

３．２．４　「発表，意見や質問を述べること」における困難

３．２．４．１　発表の場合

表８　発表における困難

困難を感じる点	学生の所属グループと人数	学生のコメント （（　）内はそれを述べた学生の所属グループ）
日本語の文を作るのが大変 （語彙・表現・構文面で）	A：１名 C：２名	自分の伝えたいことを日本語で十分伝えられない（A）
資料･参考文献を読むのが大変	C：２名	発表の準備のため本を買ったが難しいので読まなかった（C）
発音が悪いので言うことがわかってもらえるかどうか心配	C：１名	発音に自信がない（C）
※その他の一般的コメント 　発表はまだしたことがない（A４名，B２名） 　１回目はすごく大変だったが２回目からは慣れ，うまくいった。準備さえきちんとできれば大丈夫（A１名，C１名）言葉の面ではあまり問題なかった（A） 　最初は緊張したが「留学生だから日本語がうまくないのは当たり前」と思ったら緊張しなくなった（A） 　日本語で発表するのは苦手だが，なんとかわかってもらえた（C）		

彼等は全員１年生なのでまだ発表の機会は少なく，発表の経験がある学生は５名のみであった。この５名のうち「言葉の面ではあまり問題ない」と答えたのは１名のみで，あとの４名は皆日本語能力上の問題を挙げている。当初こちらでは「発表資料（ハンドアウト・パワーポイントなど）を準備するのが大変」「プレゼンテーションの仕方がよくわからない」「人前で話すと緊張して上がってしまう」など，発表特有の言わば技術的な困難を想定していたが，彼等が挙げたのは「日本語の文を作ること」「資料・参考文献を読むこと」といったきわめて基本的な日本語能力上の問題であった。

３．２．４．２　質問したり意見を述べたりする場合

得られた回答は殆どすべてが質問に関するものであったので，以下の記述は特に断らない限り，「質問すること」に関するものとする。

表９　「質問すること」における困難

困難を感じる点 (授業中に質問しない理由)	学生の所属 グループと人数	学生のコメント （（　）内はそれを述べた学生の所属グループ）
大多数の学生は日本人なので「こんな質問をしたら先生や日本人学生にとって迷惑だろう」と思う	A：２名 B：１名 C：１名	少数の留学生のために特別のケアをしてもらうのは申し訳ない。「日本語B」だったら全員留学生で同じ立場なので，遠慮することなく何でも聞けるが（A） 他の大勢の日本人学生に迷惑かもしれないと思う。授業中質問は殆どしない。質問があるときは授業後先生に聞く（A１名，C１名） 「皆はわかっているのだろう→質問したら迷惑」と思う。質問はよくするが，授業後先生の部屋に行って聞く。他大学の先生の場合はメールで聞く（B） そういうことは思わない。逆に「他の人も聞きたいかもしれない」と思って質問する。しかし質問したら「それは日本人なら誰でもわかること」と言われ恥ずかしかったこともあった（A）
適切な言葉や表現がみつからず，発言の機会を逸してしまう	A：３名 C：１名	まず母語で考え，それを日本語に訳すので，ときどきタイミングを逃してしまう（A）
恥ずかしい	A：２名 C：１名	意見を言うことは恥ずかしい（A） 前半は前の方に座れたのでよく質問したが，後半は後方に座らされたので，質問するには大きな声を出さなければならず恥ずかしい（C）
質問のために設けられた場(機会)がない	A：２	「質問しなくても単位を取るのに影響ない」と思って済ませてしまうこともある（A）
日本人と一緒の授業の場合，「日本語B」や「日本事情」におけるような先生の理解・サポートがない	A：１名	留学生の前では大丈夫だが日本人の前では大変。質問が正しく理解してもらえないかもしれないし，外国人に慣れていない先生もいる（A）

質問すると自分が留学生だということがわかってしまい，以後特別扱いされるのが嫌	B：1名	

今までの項目と異なり，日本語能力上の困難よりも心理的抵抗による困難を挙げた学生が多いのが印象的である。特に「授業中に質問すると先生や日本人学生に迷惑をかける」という考えから授業中には質問しないという学生が4名いたが，これは調査前には全く想定しなかった答えであった。彼等は教師や日本人学生にかなり遠慮をしていることが見て取れる。(ただし「他の人も聞きたいだろうと思って質問する」という果敢な学生も1名いた。)

2.5　その他の学習上の問題

その他の学習上の問題について，自由に述べてもらった。

表10　その他の学習上の問題

科目数が多くて大変（A）
(教養的科目の) 一般科目はあまり難しくないが，(教養的科目の) 基礎科目，及び専門科目が難しい（A）
後期になったら母国で学んでこなかったことが増えたので難しくなった（C）
話す機会が少ない。自分の言いたいことをうまく発表する練習をしたい（A） 講義を聞くのとバイトだけの生活なので，日本人と話す機会がない（A） 日本人の友達がいない。共通の話題が少ないので話すことがない（A）
日本語を勉強する授業が少ないと思う。もっと多くの科目を必修にした方がいい。日本語が上達しないと，専門の勉強も十分できないと思う（A）
大学に入ってから，(講義の理解以外の) 日本語力…特に語彙力…が落ちていると感じる。宿題やテストがあれば必死で勉強するが，大学ではそういうことがないから。ストレスがなく楽になったが覚えたことを忘れてしまった（A）
日本の高校生が持っているような教養の知識がない。図書館にある資料は読むのに時間がかかるので中学生・高校生向けの本があればいいと思うがない。文語の文法・語彙力もない。これらが理解を困難にしている原因だと思う（A）

3.3　問題解決のために自分で行っていることと大学，教員への要望

ここでは，上述した困難を解決するために，彼ら自身が何をしているか，つまり，1）授業で分からないことがあったときどうするか，2）日本語能力を伸ばすために何をしているか，および，3）これから大学側にどうして欲しいと考えているのかを尋ねてみた。

3．3．1　授業で分からないことがあったらどうするか

表11　授業で分からないことがあった場合の対処法

授業で分からないことがあった場合，どうするか	学生の所属グループと人数	学生のコメント （（　）内はそれを述べた学生の所属グループ）
先生に聞く	A：５名 B：２名 C：２名	分からないことを聞くこともあるが少ない。先生は別のキャンパスにいるので質問はメールでする（A） たまに先生に聞くことがあるが緊張する。聞けば詳しく教えてくれる （A）学生より先生に聞く方が多い（A） よく聞く（B） 日本語Bなら先生に聞くが，他の授業なら聞かない。日本語の先生は留学生に分かりやすい日本語で説明してくれるが，日頃留学生に接する機会のない先生はそうではない（A） 授業の後，簡単なことを聞くことはある。難しい質問は自分も用意しないと聞けないから聞けない。先生に聞きにくいような雰囲気はない。先生へのメールは利用している（A）
日本人学生に聞く	A：４名 B：１名 C：３名	日本人の友人とは非常に浅いつきあいしかできない（挨拶，表面的なメールのやりとり等）。友達といえるほどの友人はいない（A） 留学生の友人の後，日本人に聞く（A） 日本人の友人によく聞いていたが，その人が引っ越したので今は日本事情の授業で一緒の日本人に聞く（A） 学籍番号が近いので親しくなった日本人の友人にもよく聞く。よく教えてくれる（C）
留学生に聞く	A：５名 B：１名 C：２名	分からないところを聞く（A） 同国人に聞くことはたまにある（A） まず自分で調べ，次に留学生の友人，先輩に聞く（A） たまに聞くが，先生に聞くことの方が多い（A） まず最初に留学生の友人に聞く（A）
チューターに聞く	A：１名 C：３名	チューターに毎週会っている。関係良好（C） チューターに聞く（同じ学部の修士の女性で，よく会っている）が，彼女も私の分からないところが分からないので困る（C） 時間を調整するのが難しい。最初は週一回会っていたが，最近は全然会っていない（メールは時々ある）（A） 同じ学科の院生がチューターで，専門だけでなく日本語も直してくれる。チューターは２年までだが，４年まで欲しい（C）
インターネットや図書館で調べる	A：１名	インターネットや図書館で調べ，それで分からなければ先生に聞く（A）

※その他のコメント
　まず日本人学生，次にもう一回考える。更に留学生の先輩に聞く。それでも分からなければ先生（A）
　まず自分で調べる。次に留学生の友人，先輩に聞く。それでも分からないときは諦める（A）

　まず，授業でわからないことがあったときは，ほとんどの場合，日本人学生，留学生，先生に聞くようだ。この三者は回答した人数の点ではほぼ同じである。

　まず日本人学生に聞く場合，分からないことを気軽に聞けるような本当に親しい日本人の友人がいる場合が少ないという点が問題である(例外はCの一学生くらい)。多くの場合は，同じ学科，または同じ授業に出ていて顔見知り程度の日本人学生に，授業後ごく簡単に聞いているだけのようで，日本人学生に頻繁にしかもじっくりと質問することはあまりない。

　次に，留学生（同国人を含む）の友人・先輩に聞くという場合もある。今回は日本人学生，先生との関係により多くのコメントをもらったので，留学生に尋ねることに関しての詳しいコメントはあまり得られなかった。ただA（2名）の学生のように，先生や日本人学生に比べると「たまに」聞く程度のようである。

　先生に聞く場合であるが，学生により状況は異なっている。よく聞く学生もいれば(A 1名，B 1名)，先生に聞くのは緊張すると答えたり，先生に質問するにはそれなりの勉強をしてからでないとできないと考えている学生もいる(A 2名)。後者の場合は，あまり頻繁に，あるいは内容に分け入って質問することは難しいであろう。

　しかし本当の問題は，先生に聞くのは先生に迷惑だと思って遠慮し，質問を避けている学生がいることである。Aの一学生がそうで，彼は先生に質問することが忙しい先生の邪魔にならないか心配で，分からないことがあればまず本を読み，それで分からなければ留学生に聞き，それでも分からなければ諦めると述べている[7]。

　また別のAの一学生は，日本語の先生なら留学生に分かりやすい日本語で説明してくれるから質問するが，他の科目の先生はそうではないから質問しないと答えている。この場合は，質問しても先生の説明が分からないかも知れないからという理由で遠慮しているのである。

　留学生が気軽に教員に質問できるようにするためには，学生の側，教員の側のいず

7　この学生はチューターに対しても遠慮がちで，「チューターは院生で忙しいから，迷惑をかけてはいけない」と思っている。また，いろいろ質問できる日本人の友人もいない。

れにも意識の変革が必要である。

その他少数の方法としては「インターネットや図書館」で調べるというのもあるが，もちろん「人に聞く」との併用である。

最後にチューター制度の抱える問題を指摘しなければならない。今回の面接で分かったことは，ほとんどのチューターはあまり機能していないということである。チューターは留学生の学習の手助けをするためについているのだが，最初に数回あっただけで，それ以降は留学生と全く連絡がないというケースがほとんどであった（A４名，B１名）。Aの一学生は上の表では「チューターに聞く」に分類したが，最近はメールだけで，会ってはいないと答えている。「よく会っている」というのは少数で，Cの学生（３名）だけである。

以下は，チューターが機能していないことを訴える意見である。

ほとんど会わない。連絡をくれない（A）；いたが，やめてもらった。今はいないが欲しい。所属学部に関係なく，手助けしてくれる人にやって欲しい（A）；会っていない。専門が違うから。２年になったら，同じ専門の人に変えてもらうことになっている（A）；あまり会わない。「先生に言われたから」などの理由でチューターになった人が多く，留学生とチューターの関係は形式的なものだ。真面目で，ボランティアでもいいから留学生のために役に立ちたいと思っている（そういう学生は実際にいる）学生になってもらいたい。こちらから「会いたい，会ってくれ」とは言いたくない。一度こちらからメールしたことがあるが反応がなかったので，会いたくないのだと思った（B）；チューターは忙しくてあまり会えなかった。院生なので話しにくい。学部生の方がいい（A）；これらの意見から分かるのは，チューターは必要ないというのではなく，むしろもっと助けてもらいたいと考えているのである。これについては３．３．３で扱っている。

３．３．２　日本語の勉強について

「日本語の授業を受ける」以外の日本語の勉強の仕方について聞いた。多かったのは「テレビ，ラジオを聴く」（A２名，C２名）で，次に「日本人の友達と話す」（A１名，C１名），「自分で文法や会話のテキストを勉強する。」（A１名，C１名）であった。「日本にいれば自然に慣れるので何もしない」という学生も一人いた。３．４．４で述べるように，「日本語B」や「日本語C」に対する期待は高く，ほとんどの学生は日本語の上達を願いながらも，どのようにして日本語能力を伸ばしていいのかよく分からず悩んでいるという現状を示しているように思われる。

3.3.3　大学や教員に何をしてもらいたいか。

表12　大学や教員に望むこと

これからどうしてもらいたいか	学生の所属グループと人数	学生のコメント （（　）内はそれを述べた学生の所属グループ）
授業のやり方を多少変えて欲しい	A：1名 B：1名 C：2名	板書をもう少し分かり易くして欲しい（A） 内容面でも言葉の面でも，もっと説明を分かり易くして欲しい。進度が速すぎる。もっとゆっくり進んで欲しい（C） 音声，語彙の面で分かり易くして欲しい（C） ハンドアウトがあると助かる（B）
チューターに助けて欲しい	A：2名 B：1名 C：1名	変えて欲しい。今のチューターは医学部1年で忙しいし，専門も違う。同じ学科の先輩がいい（A） 留学生の希望にあったチューターがいるべきだ（A） 自分は女性で，女性のチューターはよく助けてくれる。しかし，彼女は力学が分からず，同じクラスの女子もわかっていない。男子は分かっているようだが，普段から交流がないので恥ずかしい。男子は答えは教えてくれるが，説明はしてくれない（C） チューターにもっと助けてもらいたい（B）
特に不満はない	A：1名 B：1名	授業のやり方に関して：授業のやり方に関して不満はない（A） チューターに関して：勉強のことは日本人のクラスメートや留学生の先輩に聞くので，あまり必要ない（B）
日本語の授業を充実させて欲しい	A：1名 B：1名	日本語の科目や週あたりの回数を増やして欲しい。留学生は絶えず勉強していないと下手になる。学部生の日本語の履修量は足りないと思う。もっとたくさん必修にしてもいい（A） 日本語の授業をもっと充実させてもらいたい（B）
助けて欲しいが，迷惑を掛けたくない。	A：2名	授業のやり方に関して：留学生は少数なので，留学生のために授業のやり方を変えるのは無理だと思う。他の人に迷惑を掛けたくない（A） チューターに関して：先生にもチューターにももっと助けてもらえればもちろん助かるが，みんな忙しいから迷惑を掛けたくない（A） 日本語に関して：留学生は少数なので，特に留学生のためにこうして欲しいという希望はない。自分からもっと勉強しなければと思う（A）
教室設備の改善	A：1名	教室が冬は寒く夏は暑い（A）
相談しやすい体制にして欲しい	B：1名	先生にもっと気軽に相談できるような体制や雰囲気が欲しい（B）
文化体験の機会を与えて欲しい	A：1名	日研や短期プログラムの学生に比べ，学部生は日本のことを知る機会が少なすぎる。彼らのプログラムにはそのような機会がたくさん盛り込まれているが，学部生は参加できない。学部生は大学にはいるまでは詰め込み教育で，入ってからは授業，バイトだけの生活で，日本文化に触れる機会が絶対的に不足しているから，日本のことがなかなか分からない。日研,短期プログラムの学生がうらやましい(A)

オフィスアワーの充実	C：１名	ある教科の先生にはオフィスアワーがあってよく行っているが，別の教科の先生にはない（C）
図書館の本を充実させて欲しい	A：１名	図書館にもっと基本的な知識のための本を置いて欲しい。AV 資料もほしい。正解も入れておいて欲しい。個人で買うのは高いので難しい（A）
先生は公平に	C：１名	他の留学生には親切だが私には親切ではない（C）
その他	A：１名	質問は授業を担当している先生以外にも聞けるのか？（A）

ここでは，問題を解決するために大学側，教員側にどのようなことしてもらいたいか聞いた。まず板書やハンドアウト，話し方などの工夫を望む学生が多い。「留学生は少数なので，そのために全体のやり方を変えるのは無理（A）」であろうが，留学生の存在を意識し，彼らに多少の配慮をすることで，彼らの授業の理解はかなり改善されるのではないかと考える。

日本人チューターについては，３．３．１であまり機能していない現状が明らかになったが，多くの学生は何らかの対策を望んでいる。これはチューターに期待を寄せていることの現れでもある。チューターと留学生との相性の問題等もあり難しい面もあるが，熱心なチューターの発掘，機能しない場合の速やかな交替など，課題は多い。

その他の意見で，留学生センターの業務に直接関わるものとして特に重要な点は次の３つであろう。

一つは日本語の授業をもっと増やして欲しいという希望である（A１名，B１名）。授業時間数も，内容も今より充実させて欲しいというものである。私たちには意外であったが，留学生の日本語は，入学前に較べてだんだん落ちているという留学生本人からの指摘があった。私たちは日本語で日本人の受ける授業を受けているのだから日本語の授業を受けなくても次第に上達するだろうと思いがちだがそうではなく，入学後も日本語能力を高めるためにもっと多くの日本語の授業を受けたいという。

もう一つは，３．１で述べているが，留学生は日本語能力の向上には，日本語の知識だけでなく日本の歴史，地理などの日本についての基礎的な知識を増やすことも重要だと認識しているということである。日本語の授業の他にこのようなことを学べる機会が欲しいようである。

三つ目は，せっかく日本にいるのだから日本独特の文化にも触れてみたいということであった。金沢大学には日本語・日本文化研修コースや短期留学プログラムの日本文化体験プログラムがあるのに自分たちはそれに参加できないのを残念がっている。

3．4　日本語Bについて

3．4．1　今までに履修した「日本語B」は何か

インタビューした11人のうち，「作文」８人，「講義の聴解」３人，「中級読解」６人，「口頭発表」８人，「レポート作成」６人，「上級読解」２人であった。

これらのうち，「作文，講義の聴解」はD（中級後半）レベル，「中級読解，口頭発表，レポート作成はE（上級前半）レベル，「上級読解」はF（上級後半）レベルである。

単位については，皆前期分の単位は取っている。下の設問の回答にもあるように，日本語Bは学生のレベルに合っている授業だからであろう。

3．4．2　日本語Bのクラスのレベル，理解度，必要度はどうだったか

「日本語B」のどの科目も，おおむねレベルに合っているとの回答を得た。「講義の」聴解がやや難しいとしたのが一人（C１名)，レポートがやや難しいとしたのが一人(C１名）あった（いずれもマレーシアの学生)。中国人で中級読解が少し難しいとしたのが一人あった。

理解度についてはすべての学生が理解できると回答した。

必要なことを教えていたかという問いには必要であると回答し，必要ではなかったという回答はなかった。

3．4．3　不足している科目，不必要な科目はあるか。

クラスとして欲しいと回答があったのは漢字クラスで，３人（B１名，C２名)。また発音を直してくれるクラスというのも３名（すべてA)。その他には，クラスでなくてもいいから教えて欲しいものとして，金沢弁（A)，文法（A)，(日本語能力試験の読解が出来なかったので）読解ができるように語彙を増やすクラス（A)，日本の歴史，地理，日本事情などの文化的な面（A)，(アルバイトや先生と話すときなどのために）敬語（A)，(日本人同士の話しが分からないから）話し言葉中心の会話（A）等であった。

現在の「日本語B」のうちでの不必要な科目については言及がなかった。

3．4．4　「日本語B」の単位を取ったら，もう日本語の授業は必要ないか，それとも，さらに日本語の授業を受けたいか

ほとんどの人が必要かつ受けたいと思っていることが分かった。１名だけ「生活の中でレベルアップできるので授業としては取らない」と回答した学生がいた（B)。ただし，必要だが，専門の授業のため時間がとれないだろう（または取れなかった）と

した人が3人いた（A2名，B1名）。

「日本語B」を時間の許す限り受けたいという希望が強いことが分かる。

3．4．5　「日本語B」よりレベルが高い「日本語C」があったら，受講したいか。また，受講したい人は，どのようなことを「日本語C」で勉強したいか。

受講したいかどうかについては，一人を除きすべて受けたいと回答した。(受けないと回答した学生は，「日本語B」について「生活の中でレベルアップできるので授業としては取らない」と回答した学生である（B）。(ただし，内容によっては受ける，とも回答している。）中には単位がなくても取りたい（C），必修にすべきだ（A）という意見もあった。

ここで教えて欲しい内容として出てきたのは次のような内容のものである。

①会話。「問題があったとき，どうやってそれをうまく解決するか」というコミュニケーション・ストラテジーを学びたい学生もいれば，日本人とのディスカッションをしたいという学生もいた。(A1名，B2名)

②口頭発表。「自分の意見・考えをはっきりと話すことが出来る能力をつけたい」という，話すこと一般の能力を向上させたいという回答と，「発表の仕方」を学びたいという回答があった。(A2名)

③聞き取り。「ドラマ，映画の聞き取り」と「日本事情の授業での日本人学生とのディスカッションが聞き取れなかった，電話を受けても全然分からなかった」から聞き取り能力を向上させたいという意見があった。(A1名，C1名)

④口語の知識・若者言葉の知識。日本人同士の会話が聞き取れないということから，教科書で学ぶ標準的な日本語以外に，話し言葉特有の表現，語彙など，また若者言葉などを学びたいということであった。(A1名，C1名)

⑤意外だが，古典文法を勉強したいという回答もあった。ただし古典を読みたいという理由ではなく，日常よく使うような文語表現や授業の資料に時々出てくる古めかしい日本語などが分かるように，文語文法の基本が知りたいということであった。(A3名)

⑥日本語自体でなく，日本の歴史，地理，文化，習慣，ことわざなどの社会的知識を深めたいという意見も多かった。教養の他の授業の理解や，読解力の向上のために必要と考えているようである。(A3名，B1名）ただし，これは言語科目としては開きにくい。

その他の回答としては，ドラマや映画などを勉強したい（A2名，C2名)，小説などの文学作品を読みたい（A2名。ただし一人は，どんな小説を読んだら日本語能力が身に付くのか分からない，と回答した。)，漢字（A，B，Cそれぞれ1名)，新聞，

敬語，文法（各1名。すべてA）などがあった。

さて，学部留学生は現在総合コースの中の（中，上級レベルの）技能別クラスのみを「日本語B」として受講している。上に述べられたニーズのいくつか（例えば，漢字や会話，発表，聞き取りなどの充実）は，総合コースの全クラスを開放することで多少改善される可能性はあるが，④口語・若者言葉，⑤文語文法，⑥日本についての基礎知識などは，これまでコースの中でしっかりとした位置付けを持ってこなかった面であり，これらのニーズをどのように取り入れていくかも，これからの課題となるだろう。

4．　まとめ

以上，聞取り調査の結果を紹介しそれについて解説を加えてきたが，最後に，
調査実施者にとって印象的だったことを中心に全体を簡単にまとめてみたい。

①　調査対象者全員が日本語能力上の困難を抱えており，自らの日本語能力の不足を自覚し，日本語能力を高めたいと願っている。

②　上記の日本語能力上の困難は，チューター制度の円滑な実施，教師側の配慮や工夫など，留学生の自助努力以外の要素によって改善され得る側面も大いにあることがわかった。

③　自らの日本語能力を高めるにあたっては，大学の日本語の授業の充実を望み，それによって日本語力の向上を図りたいという留学生が殆どである。この事実は調査実施者にとっては予想外であった。学部留学生は，日本語そのものの学習は早く「卒業」して専門の学業に取り組みたいと願っており，したがって，日本語の授業よりも日本での生活・学習の場での実践によって日本語力を養おうとするのではないかという先入観があったからである。しかしこの調査では，11名中10名が「日本語の授業で日本語をもっと勉強したい」と答えている。

④　日本語での学習を困難にしている原因として最も多くの留学生が挙げているのは「語彙力の不足」と「日本についての基礎知識の不足」である。このうち後者については，教養的科目の「日本事情」が開講されているが，今回の調査の結果から判断すると，彼等が必要としているのは「日本事情」で扱っている内容よりもっと基礎的な知識，たとえば日本の中学校・高校で教えられている内容に近いものであるらしいことがわかった。

今回の聞き取り調査では，一方では，学部留学生の学習上の困難は，彼等の自助努力以外の要素によってある程度改善され得る側面があることがわかった。こうした点につ

いては，機会ある毎に関係者に改善の必要性を伝えていくつもりである。また一方では，学部留学生は大学の日本語の授業に期待するところが大きいこと，そして具体的にどのようなことを期待しているかも，ある程度把握することができた。今回把握した彼等のニーズは，総合コースの改編にあたり，できる限り考慮していきたいと思っている。

参考文献

金沢大学留学生センター（2003）『金大キャンパスの国際化を考える　金沢大学留学生センター自己点検評価　1995．4～2002．9』

峯　正志，長野ゆり（2004）「日本語教育に関する調査結果」『金沢大学留学生センター紀要』NO７，p.59-73

An Interview to Kanazawa University Undergraduate Students from China, Korea and Malaysia on their Difficulties in Studying

Yuri Nagano and Masashi Mine

The present authors conducted an interview to 11 Kanazawa University undergraduate students from China, Korea and Malaysia to obtain data for the revision of the Japanese Language Program（Kanazawa University Integrated Japanese Course）, which is scheduled to start in the fall semester of 2005. This interview is specially aimed at finding the needs specific to international students at the undergraduate level. The following points were investigated : 1）Did they pass all the classes they took? If not, why? 2）What are the difficulties in studying at Japanese universities? 3）How are they trying to overcome those difficulties? 4）How do they evaluate the Japanese classes and what do they expect from them? The following are the main findings :

1）They do have difficulties in studying, feel that their Japanese ability is not enough and wish for its improvement.

2）University can remove some of those difficulties in studying through measures such as setting more flexible tutor system, giving them a little more consideration, etc.

3）Contrary to the authors' expectation, they want to improve their Japanese ability through taking Japanese classes.

4）They think they are having difficulties because of their poor Japanese vocabulary and the lack of the basic knowledge about Japan.